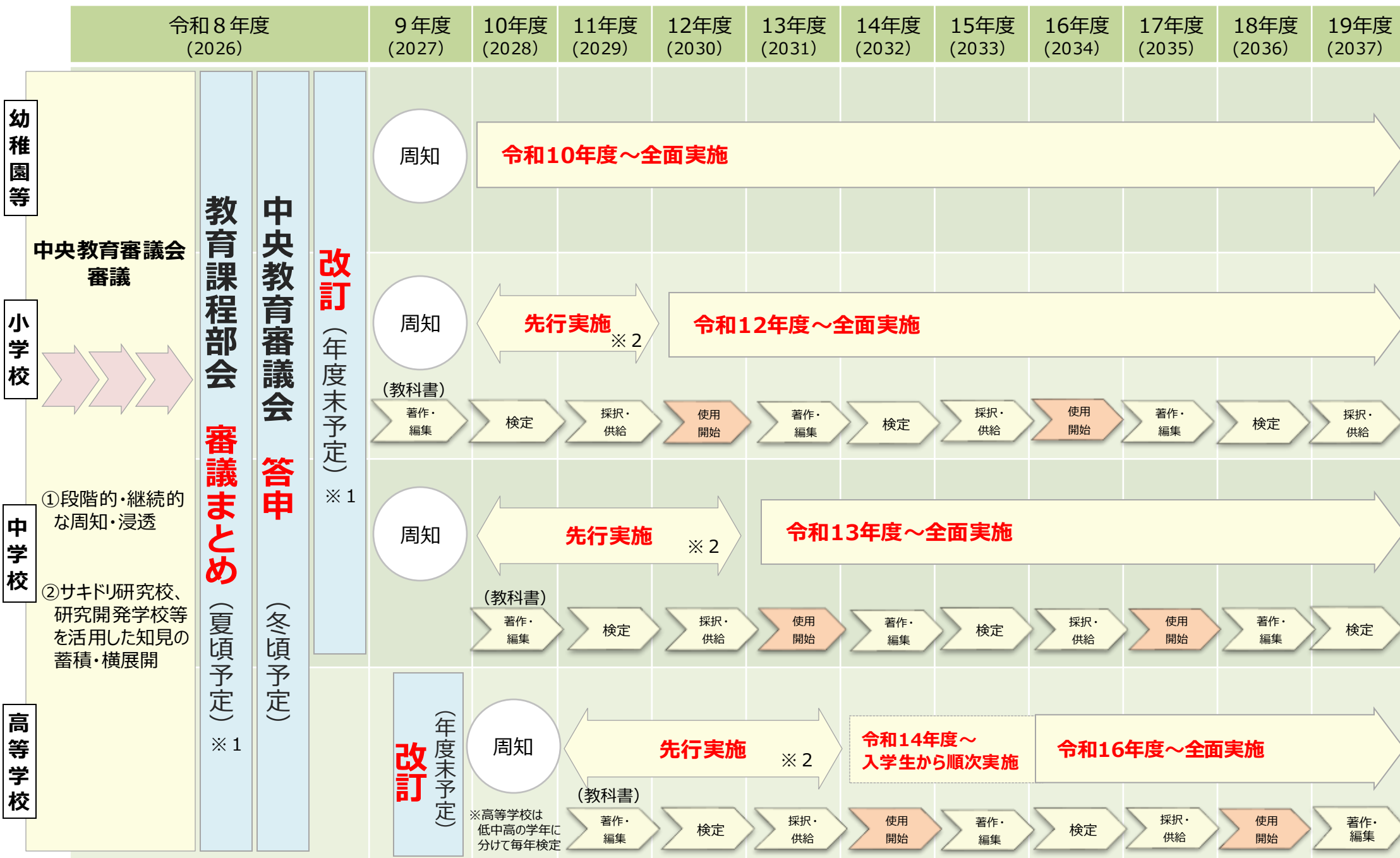


次期学習指導要領に向けた検討状況について

文部科学省 初等中等教育局 教育課程課

学習指導要領等の改訂に関するスケジュール（イメージ）

※今後変更の可能性がありうる



※1 審議まとめ及び告示案については、パブリック・コメントを実施予定

※2 移行期間中の先行実施の具体的な時期や実施する内容については随時検討

※ 3 特別支援学校学習指導要領（幼稚園及び小・中学校）については、幼稚園・小学校・中学校、特別支援学校学習指導要領（高等学校）については、高等学校と同様のスケジュールを想定

次期学習指導要領に向けた検討の基盤となる考え方

～あらゆる方策を活用し、三位一体で具現化～

主体的・対話的で

① 深い学びの実装

生成AIが社会に浸透しつつある中、より一層「深い学び」の重要性が高まっている。教師がそのイメージを掴み取り、授業づくりに生かしやすい学習指導要領とし、「主体的・対話的で深い学び」の実装を図る。

- 学習指導要領の構造化・表形式化・デジタル化
- 質の高い探究的な学び 豊かな学びにつながる学習評価
- 情報活用能力の抜本的向上
- 学習の自己調整や学習方略の指導等による個に応じた学習過程の充実

② 多様性の包摂

全ての子どもたちに「深い学び」による資質・能力の育成を図る必要がある一方、子どもたちの多様性は格段に顕在化。子供の実態や課題に応じた教育課程・学習指導を充実・可能とすることで、全ての子どもたちを包摂し、必要な資質・能力を育成する。その際、民主的で持続可能な社会の担い手を育てる上で、多様な他者と学ぶ学校が大きな役割を果たす。

- 調整授業時数制度 高等学校の単位制の大幅な柔軟化
- 特別的教育課程の新設・拡充 デジタル学習基盤の活用
- 学習の自己調整や学習方略の指導等による個に応じた学習過程の充実

③ 実現可能性の確保

①②の実現・両立は容易ではなく、教育課程の実施に伴う負担への指摘に真摯に向き合い、実現可能性を確保する必要。教育課程において教師と子供に「余白」（多様な子どもたちの深い学びを実現するための時間的余裕）を創出し、豊かな学びに繋げる。

- 調整授業時数制度（特に裁量的な時間（研究・研修等枠））
- 構造化等に伴う教科書の精選・必要に応じた内容の精選
- 授業時数や週当たりコマ数の適正化・平準化
- カリキュラム・マネジメントの更なる実装

多様な子どもたちの「深い学び」を確かなものに

生涯にわたって主体的に学び続け、多様な他者と協働しながら、
自らの人生を舵取りすることができる 民主的で持続可能な社会の創り手 をみんなで育む

学びをデザインする高度専門職としての教師 デジタル学習基盤をはじめとする基盤整備
総合的な勤務環境整備

「主体的・対話的で深い学び」の実現を通じた

自らの人生を舵取りする力 と 民主的で持続可能な社会の創り手 の育成

「好き」を育み、「得意」を伸ばす
(興味・関心)



当事者意識を持って、自分の意見を
形成し、対話と合意ができる

総合

自己の興味・関心に関わる課題の設定の充実

・「テーマ探究」と「マイ探究」をバランスよく組み合わせる

教師を起点として 共通テーマを設定
個人を起点として 課題を設定

テーマ探究 マイ探究

・「プレゼン」、「レポート」等に加え、「作品制作」も示すなど探究（外化）の在り方を拡充

・多様な興味・関心に応えるチームでの指導体制

各教科等

生きて働く「確かな知識」の習得（意味理解や知識の構造化を重視）

自分の意見や考えを根拠をもって表現する活動
(AIに頼らず、書く・話すなどの外化を通じ、習得した知識や自分の意見や考えを表現)

探究的な学びの充実
(教科においても「なぜ？」を重視し、知識の構造化や総合での課題の発見に繋げる)

興味・関心が広がる教材・学習方法の選択を促進
(デジタル学習基盤の積極的活用、紙・デジタルの双方を含む多様な教材の活用を推進)

社会・職業とのつながり・学ぶ意義の重視
(全ての教科で重視。特に中・高では「数学ガイダンス」「科学ガイダンス」を新設)

メディアリテラシーや情報モラルの育成
小・総合の「情報の領域」、中・「情報・技術科」をはじめ教育課程全体で重視（クリティカル・シンキング、情報の真偽や偏りの吟味、判断の留保、デジタルの賢い使い方と距離の置き方 等）

自律的な学習習慣の形成
(学習の自己調整を通じて、家庭学習の内容や学び方を自律的に決定)

特別活動

子供主体のルール形成

- ・納得解を創造する合意形成
- ・意見表明の機会の確保
- ・安易な多数決の回避や少数意見の吟味の重視
- ・対話と合意の手法を活用

子供主体の学校行事

- ・企画・運営を含め児童生徒が主体的に役割を担う
- ・文化的行事を「好き」「得意」を発表する機会としても明確化

※教師の適切な指導の下で行うとともに、教師の過度な負担を生じさせないことが前提

道徳

考え、議論する道徳の実装

- ・価値の実現をめぐる葛藤や価値の対立をめぐる葛藤と向き合う
- ・道徳的行為に関する実体験や実感を伴う活動を重視

幼児教育における「遊びの深まり」（言葉を用いて考える力の基礎の育成、他者と関わり協同する力の育成、遊びの中で多様な動きを伴う体験の充実と身体感覚の育成）

※幼児教育：0歳～小学校就学前までの幼稚園、保育所、認定こども園における教育

多様な子供たちの「深い学び」を確かなものに

「深い学び」の実現のための
「統合的な理解・総合的な発揮」に
向けた授業改善

子供たちの多様性を踏まえた個に応じた
学習過程の充実
(科学的根拠に基づく学習の自己調整や学習方略の指導等、
学習途中のアセスメントとフィードバック)

構造化に
伴う必要
に応じた内
容の精選、
教科書の
精選

全ての活動を通じ、
学びに向かう力・人間性等
の育成を重視

情報活用能力・言語能力の
育成を一体的に充実
(デジタルのみならず一層
身体性を重視)

障害や認知特性等
多様な実態を踏まえた調整
(全ての子供の学びやすさに繋がる授業
設計・環境整備・家庭学習を含む)

全ての活動の基盤となる
心理的安全性の確保
(学級経営、教科指導)

複層的な包摂に向けた
特別的教育課程の新設・改善

(校外教育支援センターに通う不登校児童生徒（新設）、
特定分野に特異な才能のある児童生徒（新設）、
通級指導・日本語指導が必要な児童生徒)

調整授業時数制度の活用
(一定の要件の下、各教科等の時数を減じて、
教科への上乗せ、裁量的な時間等に活用)

「深い学び」を実現するための分かりやすい学習指導要領に向けた工夫とは？

高次の資質・能力をもとにした一層の構造化・表形式化・デジタル化

課題

資質・能力の深まりや一体的に育成するイメージが掴みにくく、「深い学び」を実現する授業づくりがしにくい。



子供たちに育む資質・能力が分かりやすく、日々の授業づくりの際に教師一人一人が使いやすい学習指導要領とするため、「構造化・表形式化・デジタル化」を一体的に進め、「深い学び」を授業で具現化しやすくする。

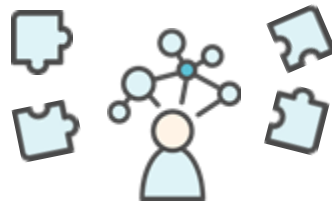
／生きて働く／ 知識及び技能

他の学習や生活の場面でも活用できる

高次の資質・能力

知識及び技能に関する統合的な理解

個別の知識や技能が相互に関連付けられて一般化され、統合的な理解となった姿



(例)関数を使えば未知の状況を予測できる

社会や生活で直面する未知の状況でも課題解決に繋げていけるよう「質」を高めることが重要

資質・能力の「深まり」の可視化

個別の知識や技能

知識① 知識② 知識③ 知識④



(例)比例・反比例の理解 / 1次方程式の解き方 等

／未知の状況にも対応できる／ 思考力、判断力、表現力等

知識・技能を活用しながら、未知の場面でも課題を解決できる

高次の資質・能力

思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮

複雑な課題の解決に向けて、個別の思考力、判断力、表現力等を組み合わせたり選んだりして総合的に働かせた姿



(例)現実の事象を数式でモデル化し、未知の状況を予測して、具体的な解決策を選択する

資質・能力の「深まり」の可視化

個別の思考力、判断力、表現力等



(例)二つの数量の変化・対応関係を見つけて式やグラフを用いて考察する 等

資質・能力の「一体的育成」の可視化

「学びに向かう力・人間性等」の特質に応じた新たな観点別評価

【論点整理で示した改善の狙い】

論点整理では、以下のような改善を意図した「学びに向かう力・人間性等」（以下「学びに向かう力」）の評価の改善が提言された。

- ◆ 形式的かつ過度な評価材料集めを抑制しつつ、多様な子供達一人一人の良さや成長を肯定的に評価できるよう、実質化を図る
- ◆ 「思考・判断・表現」の過程で一体的に見取ることとし、学びの主体的な調整が必要となる学習課題を核とした指導・評価の改善を促す

具体的には、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」（以下「思・判・表」）は従前同様に目標に準拠した観点別評価・評定を行うこととしつつ、「学びに向かう力」については「総合所見欄」における教育課程全体を通じた個人内評価と、各教科等における「思考・判断・表現」の観点別評価への「○」の付記を組み合わせた評価方法を導入することとし、「学びに向かう力」という資質・能力の特質に合わせた評価方法への改善を目指すこととした。

【更なる検討課題と方向性】

①「学びに向かう力」の評価における「○」の付記の具体的な運用方法

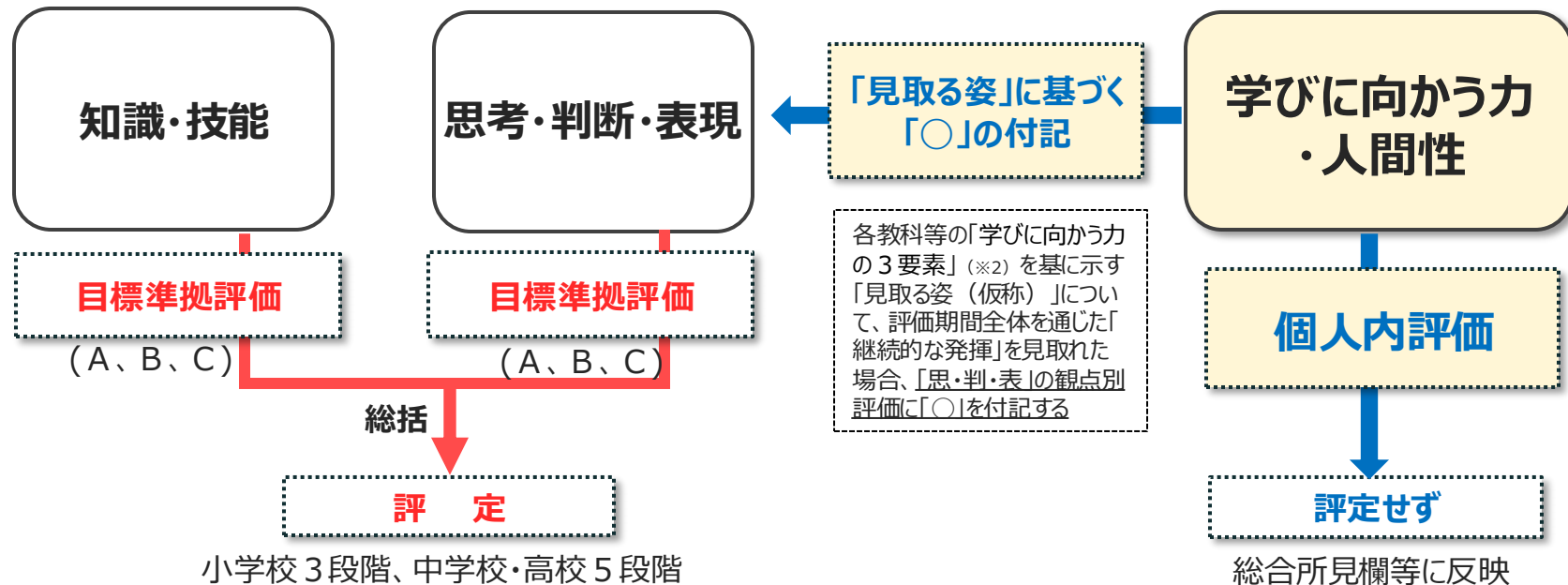
（方向性）各教科等ごとに示す「見取る姿（仮称）」（※1）をできるだけ長い期間を通じ、全体として「継続的な発揮」を見取る「学びに向かう力」が「思・判・表」と一体的に表出し、学習評価では不可分。「○」は「思・判・表」の観点別評価を介し、一体的な勘案の結果として評定にも影響

②「高次の資質・能力」の関係性の整理

（方向性）「高次の資質・能力」は直接の評価対象とはせず、教師が単元を構想し、「深い学び」の実現に資する学習過程や評価課題のデザインに活用するなど、指導や評価の改善に活用

③シンプルで資質・能力の育成に繋がる学習評価のプロセスの整理

（方向性）新たな学習評価の仕組みを学習・授業の改善に結びつけていくことができるよう、学習評価の手順をシンプルに再整理し、「文書作成」のプロセスとしてではなく、指導と評価の「構想」のプロセスとして示す



（※1） 国において示し、各学校がそのまま活用可能なものとする前提で検討

（※2） 「初発の思考や行動を起こす力・好奇心」「学びの主体的な調整」「他者との対話や協働」

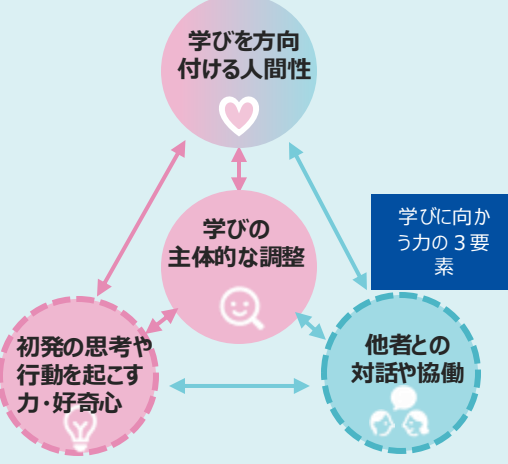
「学びに向かう力・人間性等」の「○」の付記の運用について

1 授業改善



「見取る姿(仮称)」を思考・判断・表現の過程の中で見取れるように授業改善

「学びに向かう力・人間性等の要素」



「学びに向かう力・人間性等」の目標

(中学校数学の例)

- ・ 事象に知的な好奇心や目的意識をもって問題を見だし、数学を活用しようとする態度を養う。
- ・ 他者と数学的論拠に基づいて協働し、問題解決を進めようとする態度を養う。
- ・ 問題発見・解決の過程を振り返って評価・改善しようとする態度を養う。
- ・ 数学の社会的有用性、美しさ、楽しさなどを感じる感性、想像力、直観力などの創造性の基礎を育む。

「見取る姿(仮称)」

「学びに向かう力」の「○」の付記に当たっての着眼点となる、思考・判断・表現の過程で見取る具体的な児童生徒の姿

(中学校数学の例)

- ・ 事象に知的な好奇心や目的意識をもって問題を見だし、数学を活用しようとしている
- ・ 他者と数学的論拠に基づいて協働し、問題解決を進めようとしている
- ・ 問題発見・解決の過程を振り返って評価・改善しようとしている

2 見取る



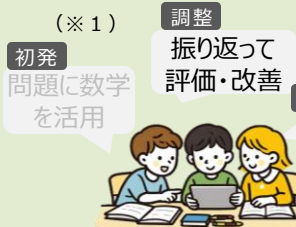
「見取る姿(仮称)」に即した行動が徐々に増え、様々な学習場面で安定して表出するようになった、「継続的な発揮」を見取ることができるか？

単元A

単元B

単元C

単元D



評価期間における思考・判断・表現の過程

(※1) 評価期間の初期は表出しにくくても、徐々に継続して発揮するようになる子供もいることに留意

3 評価の総括

観点別評価・評価の指導要録記載イメージ

知識・技能	A	総括
思考・判断・表現	B	
学びに向かう力	○	
評価	4 or 5	

一体的な勘案の結果として、評価を4とするか5とするか総合的な判断

(※2) 「学びに向かう力」については、学習評価の実施に際しては「思・判・表」の過程で見取るため要録上は「思・判・表」の欄と一体的に記載するが、育成する資質・能力の柱として「思・判・表」の一部となっただけではないことに留意

(※3) 観点別評価欄とは別に、総合所見欄において「学びに向かう力」全体の育成状況について個人内評価を記載することとなる

高等学校の教育課程の柔軟化①

(科目の柔軟な組み換え)

現行

必修

選択

学校設定

1

柔軟な組み換えを可能に

- 「各科目内容の一部または全部について他科目への移行・統合」し、科目の柔軟な組み換えを可能に

組み換えの要件のポイント

- 元の教科・科目の目標の趣旨を損なわない
- 教育課程全体として、組み換え前と同様の成果が期待される
- カリキュラム・ポリシーとの関連で、変更の趣旨・内容を公表し、生徒・保護者等に説明する

科目の内容の取扱い

- 従前同様、生徒の実態を踏まえ特に必要な場合は「基礎的・基本的な事項に重点を置くなど内容を選択して扱うことが可能」
- その上で、「発展的・探究的な事項に重点を置いた選択的な取り扱い」も可能とする

改善
イメージ

必修

組替え後
科目

選択

組替え後
科目

学校設定

科目の柔軟な組み換えの例

- 同一教科内の必修科目や選択科目を一体化した科目を作り、学習内容の重複を避け余白を生み出しつつ、探究的な学びを充実
(例) 物理基礎・化学基礎・生物基礎・地学基礎を組み合わせ、「理科基礎」
化学基礎と化学を組み合わせ、「化学総合」 など
- 複数教科に属する科目を組み合わせ、一体的に取り組む科目を作り、より実社会・実生活における実践的な課題解決に繋がる学びを充実
(例) 論理国語の一部と理数探究を組み合わせ、「アカデミック・プレゼンテーション」など

- 学校の特色を活かした学校設定教科・科目と、共通教科・専門教科の内容を組み合わせることで、学校が目指す資質・能力の育成を一層充実
(例) 公共にグローバルの観点からの趣旨・内容を強化し、「グローバル公共」など
- 学び直し科目と必修科目を組み合わせ、生徒の基礎学力保障の取組を充実
(例) 数学Ⅰに義務教育段階の学び直しを加え、「数学基礎」など

高等学校の教育課程の柔軟化②

(単位の計算方法、減単の考え方の見直し)

現行



2

1 単位の計算

50分×17コマで
1 単位を標準
(新しい算定による単
位を便宜的に「新単
位」という)

3

減単の考え方

- ・「一定の限度の下で減単可」という考え方が基本
- ・現在減単できない標準が2 単位の必修科目に
ついても、1 新単位の範囲内で減単を認める
- ・各必修「教科」に係る科目の履修単位数の合
計が3 新単位以下となる減単は不可
(公共、芸術 (音楽 I or 美術 I or 工芸 I or 書道
I)、情報 I、家庭基礎)

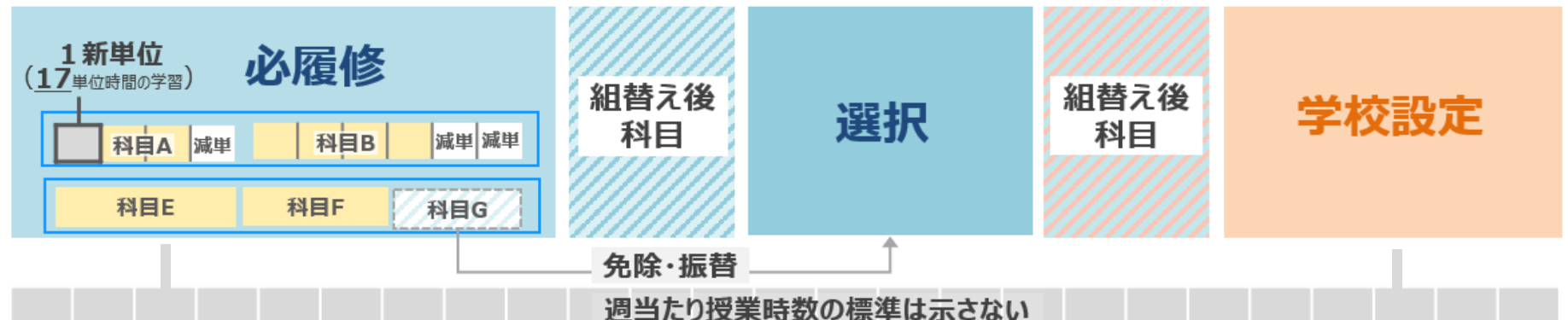
改善
イメージ



高等学校の教育課程の柔軟化③

(科目の履修免除、学校設定教科・科目の単位数の上限、週当たり授業時数の考え方)

改善
イメージ



4

科目の履修免除の要件のポイント

- ① 社会的信頼性が確立した外部試験により、**免除科目の知識・技能の習得がおおむね判断可能**
- ② **振替科目等の履修により**、免除科目の資質・能力を**発展的に育成可能で、総合的な代替性**がある
- ③ **生徒の実態・希望**を踏まえ、**資質・能力の育成に大きく上回る成果が期待**できる

履修免除の対象科目

- ・**外国語・数学**を対象に**制度運用**を開始していくことを念頭に検討
- ・具体的な外部試験の種類や、履修免除に必要な級の水準等については、外国語WG及び算数・数学WGの議論を踏まえ解説で具体的に記載。(外国語はCEFRB2以上、数学は数ⅡB以上を想定)

5

週当たり授業時数

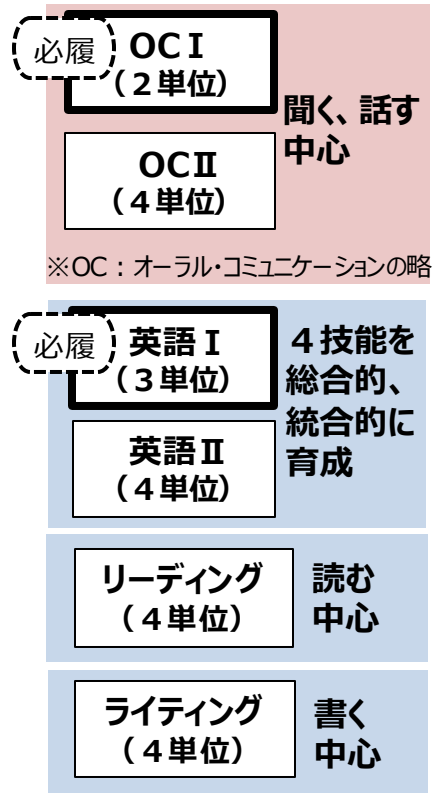
標準を示さない
(現在週当たり30コマが標準)

学校設定教科・科目の単位数の上限

卒業単位に含まれる学校設定科目の単位数上限について
普通科 ⇒ 56新単位
その他普通教育を主とする学科 ⇒ 70新単位に増加させる

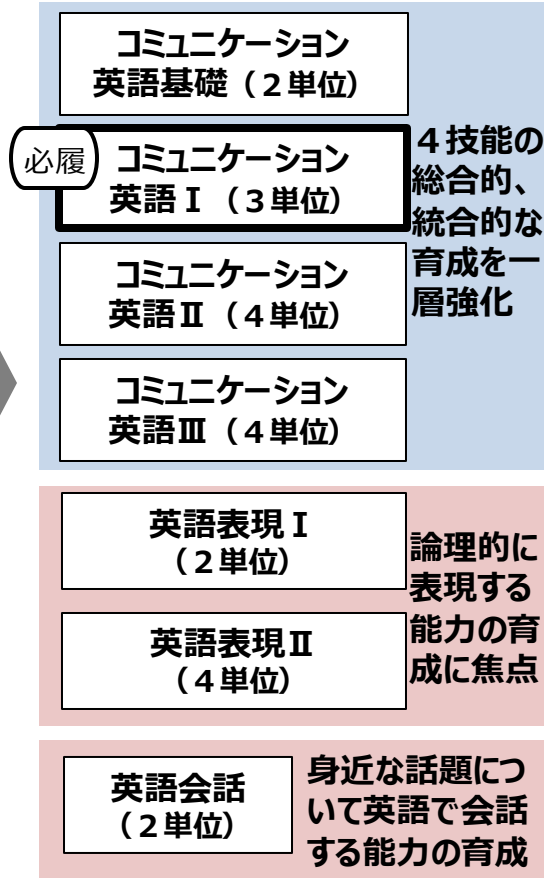
高等学校外国語科目の変遷と改訂の方向性

平成11年3月告示

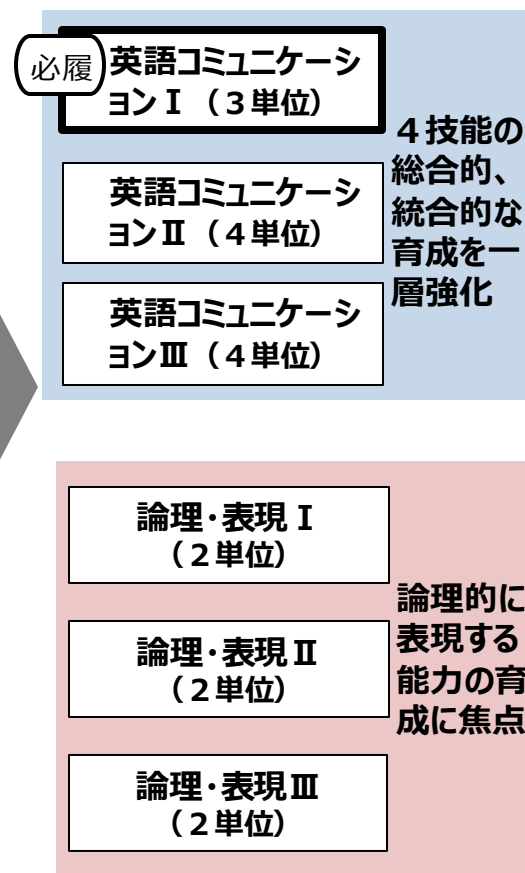


必履修はOC I か英語 I のどちらか1科目選択必履修

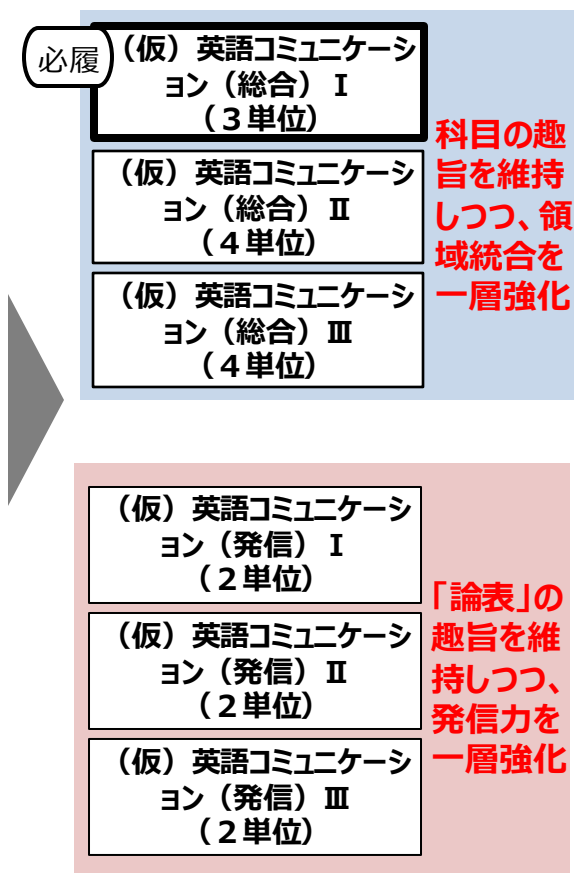
平成21年3月告示



現行 (平成30年3月告示)



改訂の方向性



【専門教科 (英語)】

総合英語	英語理解
英語表現	異文化理解
生活英語	時事英語
コンピュータ・LL演習	

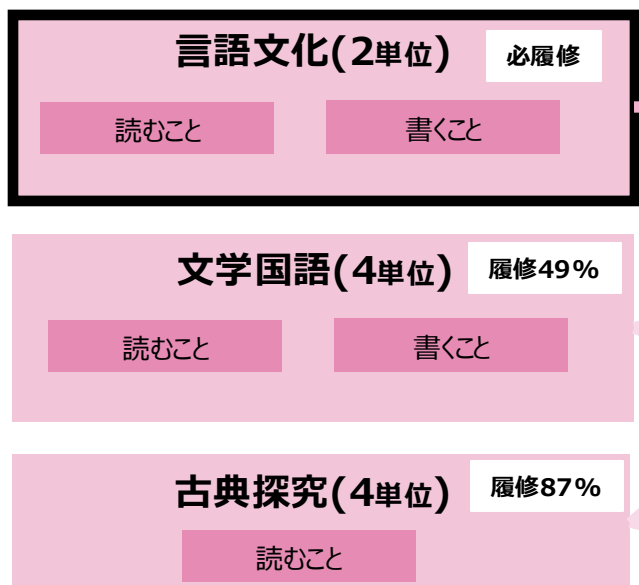
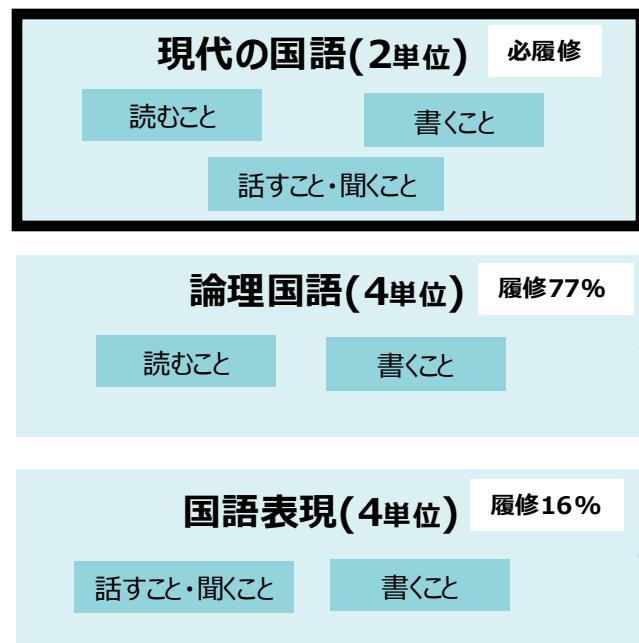
総合英語	英語理解
英語表現	異文化理解
時事英語	

総合英語 I・II・III
ディベート・ディスカッション I・II
エッセイライティング I・II

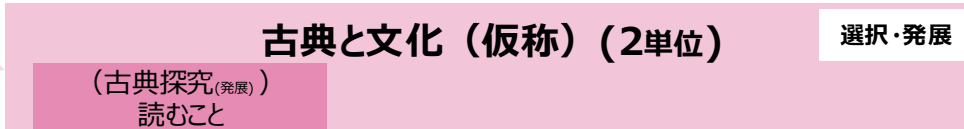
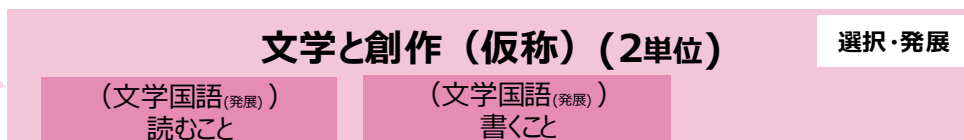
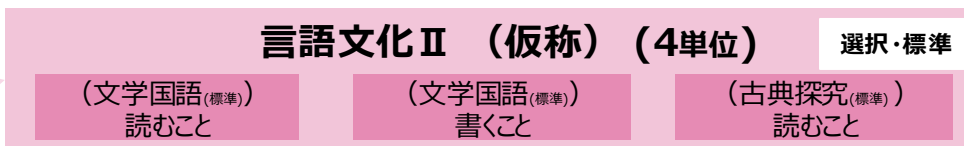
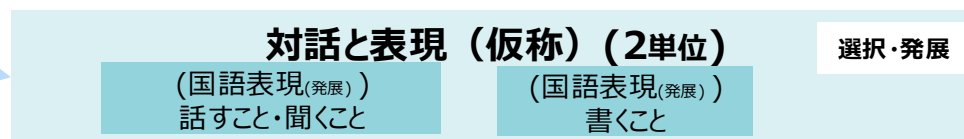
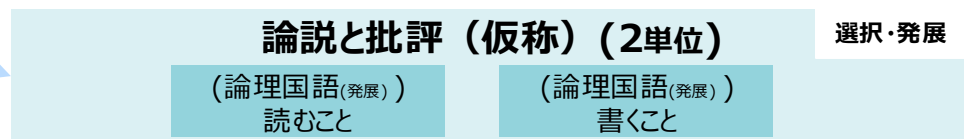
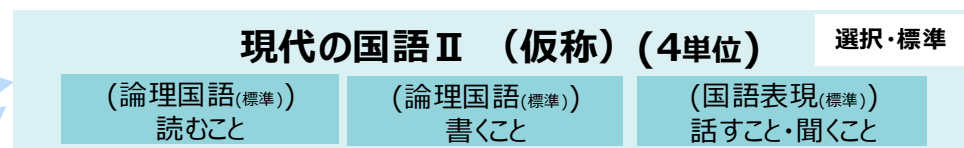
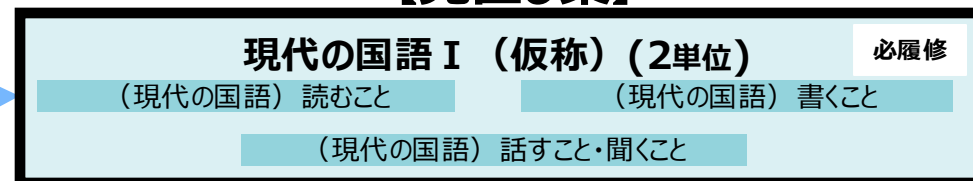
※上記科目の改善の方向性を踏まえ、必要な改善を行う

高等学校国語科の科目構成の見直しイメージ（全体像）

【現行】



【見直し案】



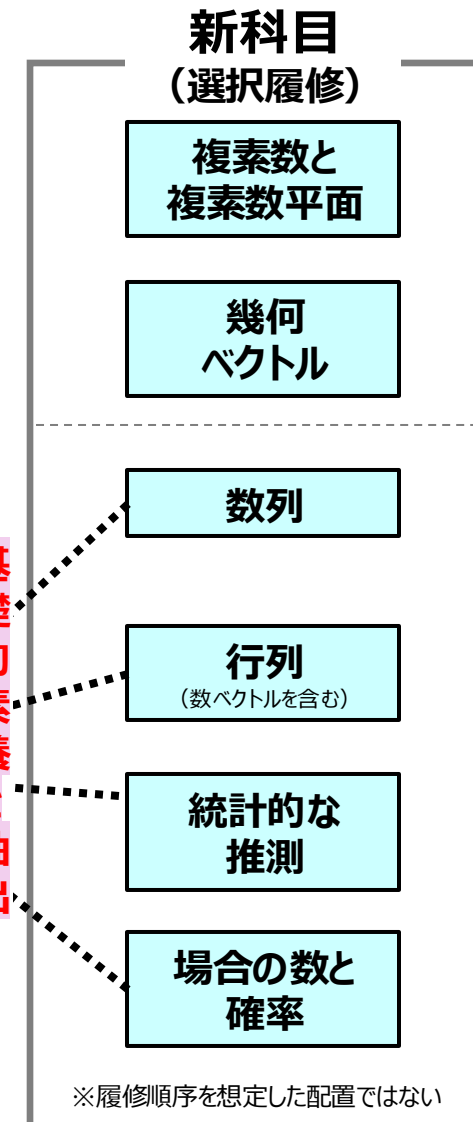
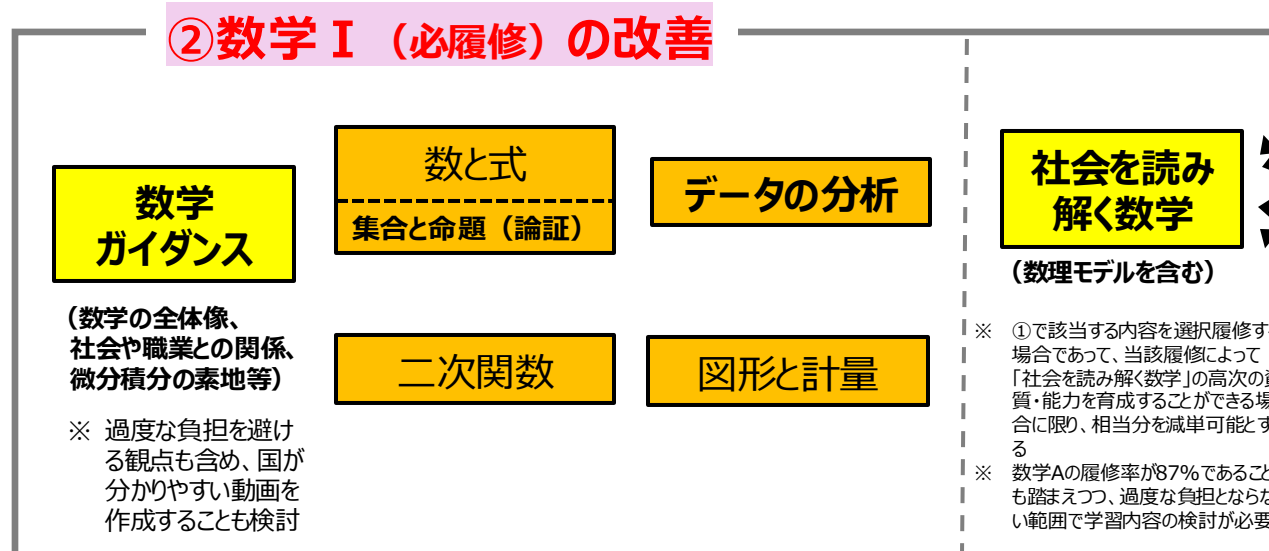
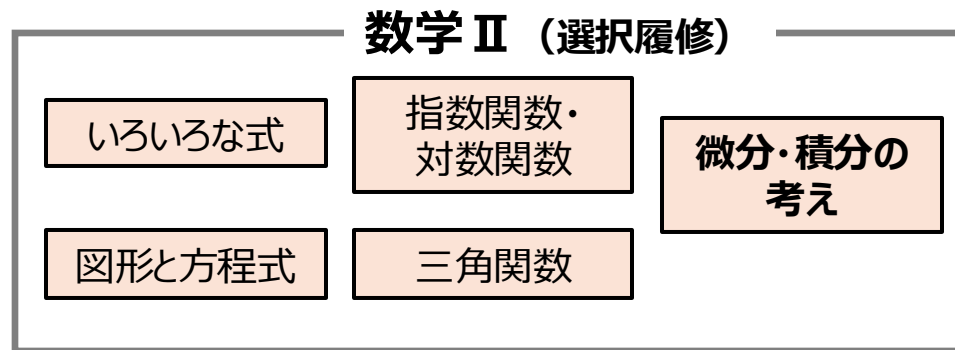
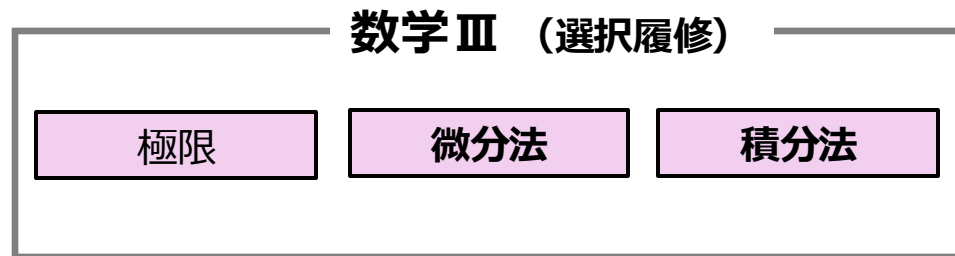
主に論理的思考力や
コミュニケーション能力の育成
(主に論説文・説明文中心)

主に多様な他者の感性や情緒
を理解し、豊かに想像したり
表現したりする力の育成
(主に文学・古典中心)

※ 現行の「%」は教科書の需要数を基に推計した履修率

高等学校数学科の科目構成に関する見直しの方向性

①ABCの区分けをなくし、
必要な学習内容の選択を容易化



基礎的素養を抽出

▶ 学習内容の実質的増加につながらないよう、全体の学習内容について必要な精選を図る。

高等学校共通教科の構成と標準単位数について

現行学習指導要領での構成

◎：必修修 ○：選択必修
▲：必修修のうち減単可のもの

教科等	科	目	標準単位数	教科等	科	目	標準単位数							
国語	現代の国語	語文	◎ 2	芸術	音楽	I	○ 2							
		語文	◎ 2			II	2							
		語文	4			III	2							
		語文	4			I	○ 2							
		語文	4			II	2							
		語文	4			III	2							
地歴	地理総合	◎ 2	外国語			英語コミュニケーション	I	◎ 3 ⁽⁻¹⁾						
		◎ 3					II	4						
		◎ 2					III	4						
		◎ 3		I	2									
		◎ 3		II	2									
		◎ 3		III	2									
公民	政治・経済	◎ 2		家庭	家庭基礎		◎ 2							
		2					◎ 4							
数学	数学Ⅰ	◎ 3 ⁽⁻¹⁾					情報	情報Ⅰ	◎ 2					
		4	理数			理数探究基礎			2					
		3							総合的な探究の時間	◎ 3～6 ⁽⁻¹⁾				
		2									保健体育	◎ 7～8		
		2											◎ 2	
		2												
理科	科学と人間生活	◎ 2												保健体育
		◎ 2		◎ 2										
		4			◎ 2									
		◎ 2					◎ 2							
		◎ 2	◎ 2											
		◎ 2												
保健体育	体育	◎ 7～8				◎ 2								
		◎ 2												

※：必修科目の標準単位数の横に付記している（-○）は、減単が可能な単位数。
次期の表においても同様。

次期学習指導要領での構成（案）

■：現行から変更するもの

教科等	科目	標準単位数	教科等	科目	標準単位数	
国語	現代の国語Ⅰ	◎ 4 (-1)	芸術	音楽Ⅰ	○ 4	
	言語文化Ⅰ	◎ 4 (-1)		音楽Ⅱ	4	
	現代の国語Ⅱ	8		音楽Ⅲ	4	
	論説と批評	4		美術Ⅰ	○ 4	
	対話と表現	4		美術Ⅱ	4	
	言語文化Ⅱ	8		美術Ⅲ	4	
	文学創作	4		工芸Ⅰ	○ 4	
古典と文化	4	工芸Ⅱ		4		
地歴	地理総合	◎ 4 (-1)		工芸Ⅲ	4	
	地理探究	6		工芸Ⅳ	4	
	歴史総合	◎ 4 (-1)	書道Ⅰ	○ 4		
	日本史探究	6	書道Ⅱ	4		
公民	世界史探究	6	書道Ⅲ	4		
	公理・経済	◎ 4	英語コミュニケーション（総合）Ⅰ	◎ 6 (-2)		
数学	倫理	4	外国語	英語コミュニケーション（総合）Ⅱ	8	
	政治・経済	4		英語コミュニケーション（総合）Ⅲ	8	
	数学Ⅰ	◎ 8 (-3)※1		英語コミュニケーション（発信）Ⅰ	4	
	数学Ⅱ	6		英語コミュニケーション（発信）Ⅱ	4	
理科	数学Ⅲ	6		英語コミュニケーション（発信）Ⅲ	4	
	新選択科目（※2）	2～12		英語コミュニケーション（発信）Ⅳ	4	
	科学と人間生活	○ 4 or 8 (-1)		家庭	家庭基礎	○ 4
	物理基礎	○ 4 (-1)			家庭総合	○ 8 (-3)
	化学基礎	○ 4 (-1)			情報	情報Ⅰ
	生物基礎	○ 4 (-1)		情報Ⅱ		4 ※3
	保健体育	生物基礎	○ 4 (-1)	理数	理数探究基礎	2
地学基礎		○ 4 (-1)	理数探究		4～10	
保健体育	体育	◎ 14～16 (-2)	総合的な探究の時間	総合的な探究の時間	◎ 6～12 (-2)	
	保健	◎ 4 (-1)				

※1：数学Ⅰに新設する学習内容「社会を読み解く数学」に相当する内容を新科目で選択履修する場合は数学Ⅰから減単可能であることを別途整理

※2：数学科における「新選択科目」の名称については現在検討中

※3：情報Ⅱは、今般の情報活用能力の抜本的な向上に向けた充実に伴い、より発展的な課題解決や価値創造の実践のために必要な場合に、追加で一定の単位数を配当する例を別途解説等で示す

卒業単位数：74単位 必修単位数：38単位（減単時最低35単位）

卒業単位数：148単位 必修単位数：78単位（減単時最低64単位）

情報活用能力の抜本的向上と質の高い探究的な学びの実現

課題

生成AIなどデジタル技術の発展が進む中、情報活用能力の育成にあたっての指導内容が必ずしも十分でなく、小中高通じた育成体系が不明確。



情報活用能力を各教科も含めた探究的な学びを支える基盤と位置付け、小中高を通じた体系的・抜本的な教育内容の充実を図る。デジタルの負の側面にも対応しながら情報技術を自在に活用して課題解決ができる人材を育成する。

幼児教育

自発的な活動としての
遊びを通じた学び

低学年

生活科

※具体的な活動や体験を通じた学び

小学校

中学年

高学年

総合的な学習の時間
探究

※課題解決を通じて生き方を考える

+ 情報の領域

活用

中学校

総合的な学習の時間

活用

情報・技術科

活用

高等学校

総合的な探究の時間

※自己の在り方生き方と一体不可分な課題に取り組む

活用

情報科

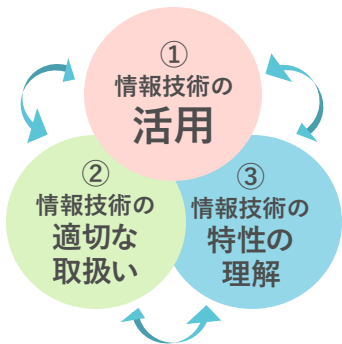
※小中の系統性を踏まえて情報科の内容を充実する方向で検討

活用

各教科等

※育んだ情報活用能力を各教科での探究的な学びを支え、駆動させる基盤としても活用

情報活用能力を構成する各要素



①情報技術の活用

情報技術の基本的な操作及び情報技術を活用した情報の収集、整理・比較、発信・伝達等に関すること

②情報技術の適切な取扱い

情報技術を扱う際の留意事項に関すること（情報モラル、権利と責任等）

③情報技術の特性の理解

情報技術の特性の科学的な理解に関すること（コンピュータの仕組み、データ活用等）

小学校段階

体験的な活動を重視し、「①活用」を中核としながら、「②適切な取扱い」、「③特性の理解」と相まって培う

中学校段階以降

各要素の内容を深めつつ、より抽象的・科学的な理解を必要とする「③特性の理解」を一層重視

中学校 情報・技術科 イメージ

技術を活用して実生活・実社会の課題を探究的に解決する内容の充実を図る

A 材料と加工の技術
(木材での作品製作等)

B 生物育成の技術
(作物栽培等)

C エネルギー変換の技術
(電気回路等)

D 情報の技術
(情報メディアの特徴、プログラミングによる問題解決等)

3Dプリンタ、センシングデータ、シミュレータの活用等、情報技術との関わりを強化する観点から、取り扱う内容を充実させる

小学校段階での改善を土台とし、大幅な充実（生成AI、プログラミング、情報セキュリティ等）を行うとともに、他の3領域の基盤と位置付ける

外国語WG取りまとめ案（概要）

背景・課題

- 外国語でコミュニケーションを行う活動を中心とした指導の必要性が浸透し、一定の英語力を有する生徒の割合が増加
- 一方で、教科書における語彙のばらつき、中学校の内容の高度化、段階的な指導・校種間の接続や、小学校における「書くこと」、中高における「話すこと」「書くこと」の発信の領域が課題
- AIの飛躍的な発展により手軽に高精度の翻訳が可能になる中、英語を学ぶ動機が弱まっている可能性も踏まえ、AIの活用が当たり前となる社会を前提として、外国語を学ぶ本質的意義を再定義する必要

主な改善の方向性

AI時代に外国語を学ぶ「本質的意義」

- 「言葉、文化、コミュニケーションへの深い理解を育むこと」と「自分の考えが磨かれて思考が深まるとともに、人間関係が豊かになること」を柱に要素を整理
(目方・考え方等に反映)

高校の科目の見直し

- 英語によるコミュニケーションを中核とする科目趣旨を示しつつ、5領域を総合的に扱う「英語コミュニケーション」は「英語コミュニケーション（総合）」に、話すことや書くことを中心に扱う「論理・表現」は、発信力を一層強化する趣旨を明示するため「英語コミュニケーション（発信）」に変更

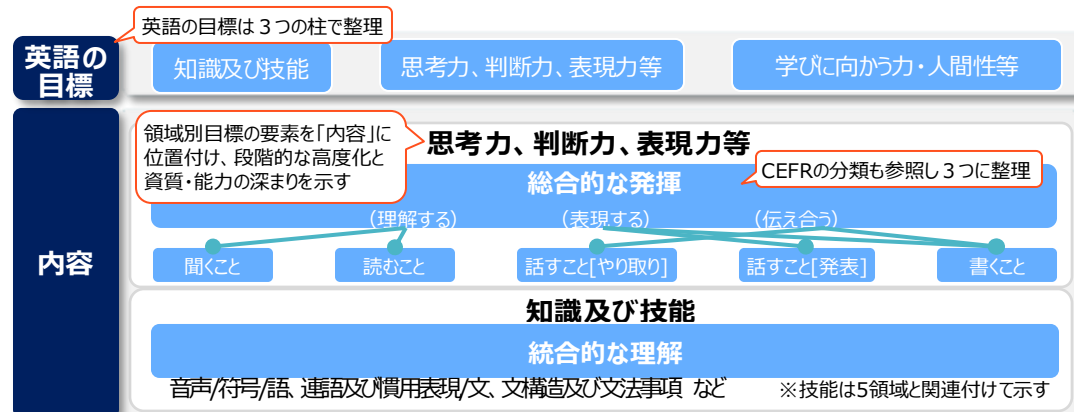
内容の精選と基盤語彙リストの作成

- 話題について、「社会的な話題」を「身近な社会的な話題」にする等、難易度を適正化し、学年段階の目安を示すとともに、身近なものから段階的に抽象的なものを取り扱うようにする
- 中学校の文法事項について、使用頻度の高いもの等を本文で具体的に明示し、指導対象の焦点化、難易度の適正化を図る
- 重要な語彙を様々な場面等で繰り返し扱い、児童生徒が活用することができるよう、指導すべき語彙数の精選も含めて、国が基盤語彙リストを整備
※教科書発行者に対して、当該リストに掲載されている語を教科書で使用することを推奨

育成すべき資質・能力と活動の整理

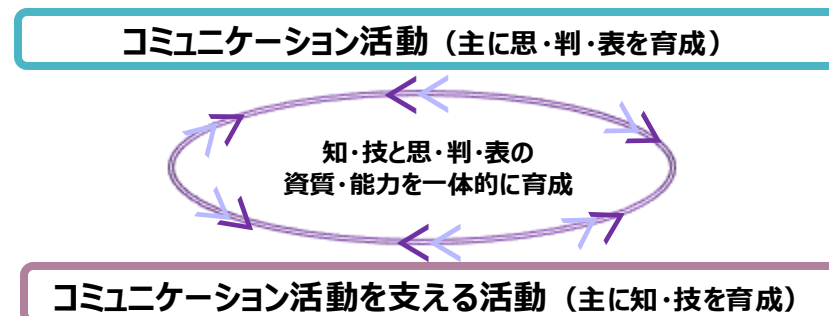
① 資質・能力の構造化

- 「外国語を使って何ができるようになるか」の段階的な高度化を「思考力、判断力、表現力等」の深まりとして示し、観点別評価も行いやすくするため、現行の領域別の目標の要素（聞くこと、読むこと、話すこと「やり取り」、話すこと「発表」、書くこと）を「思考力、判断力、表現力等」の内容に移行し、学年段階の目安とともに示す



② 資質・能力をベースとした活動の見直し

- 「言語活動」を通した指導の推進に一定の進捗が見られる一方、資質・能力との関係が十分に整理されておらず、「知・技」を育成するための段階的な指導の必要性や具体的な方法が分かりにくいなどの課題があることを踏まえ、必要な活動を「コミュニケーション活動（主に思・判・表を育成する活動）」と「コミュニケーション活動を支える活動（主に知・技を育成する活動）」に再整理



- **PISA調査では日本の15歳の生徒の読解力は世界トップクラスを維持している一方、自分の思いや考えを表現することや、目的や場面に応じたコミュニケーション等に課題。**また、校種間の**内容の系統性**や**高校の科目編成等**にも課題。
- 生成AIの発展や社会の多様性と分断の危険性の双方が増すこれからの社会においては、**自らの考えを言葉にし、論理的かつ説得的に表現し対話する力**や、**多様な他者の感性や情緒を理解するとともに、それらを通じて自らの思いや経験を効果的に表現する力**、**他者と協働して考えを深める力**など、**人間ならではの力の育成が必要**。

主な改善の方向性

小・中・高における系統性の明確化

- 小・中・高を通じて育成を目指す資質・能力を明確にするとともに、指導の系統性を重視する観点から、**小・中・高で教科の目標を統一**
- **「見方・考え方」**は、言葉そのものの意味や働き、使い方などを吟味しながら思考・判断・表現する資質・能力を育成する教科特性や、卒業後の社会との接続の観点も踏まえ、**小・中・高で統一的に設定**

小・中・高を通じた内容の関連性・系統性の整理等

①〔思考力、判断力、表現力等〕の整理

- 児童生徒が複数の単元の学習で出合う様々な話や文章を、社会的な文脈の中でどのような機能を果たしているかという観点から捉え、それぞれの機能に応じて思考・判断・表現することができるようにするために、**「話や文章の機能」を軸に資質・能力を整理**

（話や文章の機能）
一部抜粋

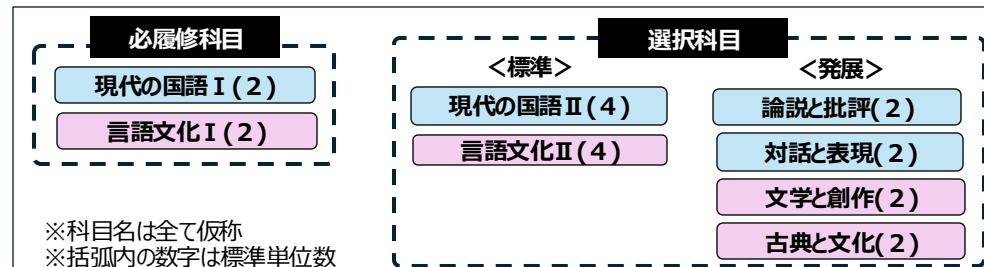
【 事実や知識の整理と理解（仮称） 】事物や事象の構造・しくみ・意味・特徴・因果関係などを整理し、筋道立てて分かりやすく示すことを通して、理解を促す機能
【 考えや主張の理由付けと吟味（仮称） 】考えや主張を、理由や根拠と結び付けて筋道立てて示すことを通して、判断や納得を促し、必要に応じて考えや行動に働きかける機能
【 思いや経験の表出と想像（仮称） 】経験や想像した出来事・情景、思いや心情などを多様な表現の工夫によって描き出すことを通して、想像し、感じたり考えたりすることを促す機能
【 協働による考えの深化や合意（仮称） 】他者と協働して互いの考えや情報を出し合い、吟味・調整することを通して、理解や考えを深め、必要に応じて合意形成や意思決定に向かうことを促す機能

②〔知識及び技能〕の整理

- 具体的な指導がイメージしやすいように、**二側面で整理しつつ、「事項のまとめり」を設けて分類して構造的に示す**
 - **運用しながら深める側面**（各領域の学習の過程で生かし深める）
 - **教養として深める側面**（各領域の学習を支える文化的な知識や態度、教養として深める）
- 話したり聞いたり、書いたり読んだりする際に、効果的に知識・技能を活用するための具体的な学習方略等について、認知心理学などの知見を踏まえ整理

高校の科目の見直し

- 必修修の枠組みは維持しつつ、**論理的思考力、感性・情緒の両面について、二項対立に陥らず、バランスよく統合的かつ効果的に育成するため選択科目を再編**。**標準的な選択科目として現代の国語Ⅱ・言語文化Ⅱ**を創設しつつ、**多様な選択が可能な発展的な科目群**を設ける



内容の精選等

- 〔思考力、判断力、表現力等〕については、**扱う話や文章の種類と、学習過程で働かせる思考・判断・表現の要素を一体的に整理し、一括りの事項にまとめ精選**
例：「意見を述べる文章」という文章の種類と、「主張を明確にする」、「表現を工夫する」などの思考・判断・表現の要素を一括りの事項として示す
- 〔知識及び技能〕については、内容の重なりや指導上の重点が見えにくい部分は、**分割・統合する等して系統性が明確になるようにしつつ内容を精選**
例：「漢字の読み書き」と「偏やつくり」の内容を統合して一括りの事項として示す
- **情報の領域等との役割分担**による内容の精選（小3タイピングは情報へ移行等）
- 教科書についても、教材等の精選・再構成や、「基幹教材」と「関連教材」の明確化、系統性の明確化による**教材等の整理を促進**

学習・指導等の改善

- 国語科の学びと各教科等の学習活動の充実との関係を整理することにより、**教育課程全体を通じた言語能力の育成を一層推進**
- **ICTのより一層の効果的な利活用**に向けた改善・充実、書写教育の意義や留意点等の整理、調整授業時数制度や単位制の柔軟化を活用した**柔軟な教育課程の編成・実施の工夫等**

- 国際的な学力調査において、日本の児童生徒の数学的リテラシーは世界トップクラス。一方、算数・数学が「楽しい」「社会で役に立つ」「数学を使う職業につきたい」と回答する割合は低い。「好き」「授業がよく分かる」割合も小→中で低下傾向。算数・数学は系統性が強く、学習困難な事項が雪だるま式に増加していく傾向も指摘。
- こうした中、高校卒業後の理工系への進学割合はOECDワースト2位（大きな男女差も存在）。2040年には理系人材が約120万人不足。
- ①社会・職業生活において必須となる数学的素養を全国民が修得できるよう、また、②科学技術・学術や成長分野を担う理系の専門人材の育成を図る上で、算数・数学教育は一層重要。特に生成AIに振り回されない批判的思考力を身に付けるためにも数学的素養は必要不可欠。児童生徒が小学校段階から算数・数学を学ぶ楽しさや意義を実感し続け、社会で生きて働く学びを着実に積み重ねられるよう、小中高の学習内容の見直しや、指導の一貫性・系統性・連続性の一層の確保を図る必要。

主な改善の方向性

小・中・高における目標・分野等の接続強化

- 指導の一貫性・系統性・連続性を一層確保する観点から、小・中・高で教科の目標を統一
- 「見方・考え方」は、メディアリテラシー、クリティカル・シンキングの観点や社会との接続も踏まえ、小・中・高で統一的に設定

事象や言説を数理の視点から捉え、論理的、統合的・発展的、批判的に考察すること

- 学校段階間のつながりや学問的系統性を明確化する観点から、小・中・高（必修）の学習内容を共通する6つの「分野」で統一的に整理（数と式、図形、変化と関係、データと確からしさ、論証、社会を読み解く数学）

クリティカル・シンキングにつながる学習内容の重視

- 現代社会のクリティカル・シンキングの重要性の高まりを踏まえ、小学校における論理的に説明する活動や、中高における数学的推論・論証（証明）等の学習を充実

小学校における学習内容の見直し

- 割合・比・分数など、習得・定着に課題が見られる内容については、確実な習得・定着を図るため、学習内容やその排列を改善

中・高における「数学ガイダンス」の新設

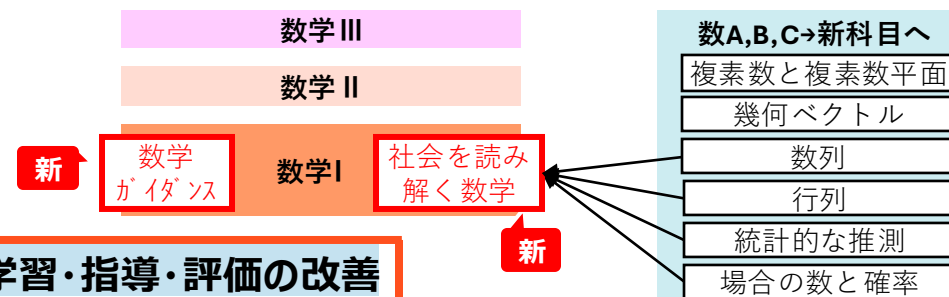
- 中学校以降の数学において学習内容同士のつながりや数学と社会・職業とのつながりが見えづらい状況を改善するため、数学の教育課程全体の見取り図や数学と社会・職業とのつながり等を学ぶ「数学ガイダンス」を中・高で新設

内容の精選等

- 算数・数学の系統性には十分留意しつつ、「統合的な理解」「総合的な発揮」の獲得に必須でない内容を中心に、学習内容を見直し・精選
- 教科書の記載内容について、「統合的な理解・総合的な発揮」の育成上必須の内容なのか、必要に応じて扱うべき内容なのかといった指導上のグラデーションを明示することや、学校種を超える発展的内容やコラム等には時数を配当しないこと等を教科書会社に要請

高校の科目の見直し

- 高校卒業時に必須となる数学的素養の習得のため、必修科目「数学Ⅰ」に、実社会における数学的場面をもとに「場合の数と確率」「統計的な推測」「行列」「数列」の基礎的素養を学ぶ「社会を読み解く数学」を新設
- 選択科目A・B・Cについては、大学での数理・データサイエンス・AI教育につながる内容や生活等で必要な内容が分散していることから、興味関心や進路希望等に合わせて学習内容を選択履修しやすくなるよう、1つの新科目に統合し内容を再編



学習・指導・評価の改善

- 教育課程の柔軟化により、例えば、定着に課題のある単元の学び直し等が可能となること等を周知
- 算数・数学における個に応じた学習過程、探究的な学び、SESの影響を緩和する指導、演繹的な指導と帰納的な指導のバランスの見直し、AIを含むICTの効果的活用方法については国が好事例を積極的に周知